

大関五郎研究(その2)

キーワード 孤独 愛情 純真 家族 温かさ

小野 孝尚

V 詩集『大関五郎詩集第一』の世界

詩集『大関五郎詩集第一』は大正十二年二月二十四日抒情詩社から出版された。この詩集は、二部構成をとっている。第一部には新作を置き、第二部には旧作の『愛の詩集』を再収録したものであった。

ここでは第一部の新作を対象として考えてみたい。前編に収められた作品は百三編であり、巻頭には次の詩が掲げられている。

母の家にて

逢ひに来た身が
たまらなく寂しい
姑にもものいふ
母の姿だ

ときどき目白が鳴きかはし

荷馬車の鈴が續くひるすぎを

弟たちの父親は

店に働き

さらさら

さらさら

障子の向こうで

妹が髪をすいている

「はひつたはひつた

逃げた目白が

籠さはひつた」

小僧と弟が大喜び

やるせなげにほほえみ多みながら

鉄瓶に手をあてて

母はしんみりと

妹をよぶ

私は行かう

野に咲く花をなつかしみ

静かな星にあこがれて

いつも私は旅人なのだ

他家に嫁いだ母に会いにきたが、姑・母・父親・妹・弟・といった新しい家族の中には入れず、遠くからの存在であることが聴覚を中心とした表現に良く表れている。

最終連では、母はもう永遠に自分だけのものでは無いといった孤独を感じ、野の花を愛し、星にあこがれ生きて行こうと決心する。母の再婚先は、栃木県黒羽町の旧黒羽藩士の材木商であった。五郎にとっては、父との死別、母との生別という寂しい境遇の中で、祖母の手によって育てられ、いつも「俺はみなしごだ」と口癖のように言っていた。五郎は生来生一本で真実を求めて生きるという性格であり、経済的には大変に恵まれていたが「いつも私は旅人なのだ」と自分自身に言い聞かせていたのである。作者の孤独感が強く表

れており大変に寂しい詩である。

栗

ふたりたのしく

やまぢをゆきて

こころしづかに

ひろひしものか

はるばるとどきし

ちひさきはこに

つやのよろしき

やまぐりのいろ

みやここひしと

やまぢをゆきて

つまをいたはり

ひろひしものか

田舎の友人からはるばる届いた贈り物の光沢のある山栗の実を手にして、友夫妻の心境や友夫婦の睦まじさを述べている。送り手

は愛妻家の柳橋好雄であろうか。

とんぼ

しづかなしづかなみづのいろ
こころのはてにほのぼのと
おもかげびとがあらはれて
おとぎばなしをするまひる

すみてながれて

ゆくものに

かげをおとして

とんでゆく

とんぼよ

おれはさびしいぞ

静かに流れ行く川の水音を色に置き換え聴覚を視覚に変えて表現している。「こころのはて」は心の底。「おもかげびと」は母。微かに残っている母の思い出。一連はメルヘン的な世界。

二連、澄んで流れて行く川に対照的に黒い影を写し飛んで行くトンボにストリートに自分が孤独で寂しいことを訴える。

作品の舞台となったのは旭村上太田を流れる大谷川であり、歌集『寂しく生きて』の中でも次のように歌っている。

川岸にしづかに音をたつる竹いちように青くなびきけるかな

ひとところうごかぬ水にかけおとし鴉一羽が飛びすぎにけり

秋の日の静かに澄んでゆったりと流れ行く川の上をトンボが飛んで行く。そのトンボに直情的に語り掛け、作者の孤独な寂しさが表現されている。

花やしき

母なれば

その子なれば

浅草に

紅茶をすすり

なつかしむ

秋風に

乳戀しの

猿あれば

眼をそらす

わが母よ

晝たけて

喜劇はじめの

鈴の音を

われは聴く

初めて上京した母は、何もかもが珍しいものばかりで、五郎は母を田舎者とは言いながらも東京の名所を案内している。一連、親子でなつかしさに思いをはせる。二連、しかしその幸せな空気は崩れてしまう。ふと母は子猿を見て罪悪感を思う。そんな母の姿を見入っていた作者自身にも幼い時が思い起こされ寂しさが過ぎる。親子二人の間に重い空気が流れる昼盛りの中、喜劇始まりの鳴り響く鈴の音をどこか遠くに感じながら……

妹

妹よ

おまへのお母様が私を残して

おまへの家の人となつたときから

私を手一つで育てて下すつたお祖母様だ

おまへを見れば

涙がにじむ

五月の晝の

あたらしい土の匂

妹よ

私のお祖母様が落ちてゆく

暗い暗いところを みつめている

祖母のはるは旧水戸藩士族今井新平惟孝（二百石）の長女（弘化二年三月四日生まれ）で祖父俊徳の妻。誠に品の良い婦人であり、女手で大関家を守った。

大関家の家訓（令）の主な項を見ると、

一、元旦は塩鮭にして餅を食す（正月料理は二日から）

一、秋の魚・鯛は門をくぐれない（屋敷内には入れない）

一、柵は早朝か夕暮れに取り替える

一、妻は夫の右に出ない

一、家長への来客は一つ紋付き羽織で応対する（女の二つ紋付き

羽織は日常着)

- 一、四季を通じ足袋を履く
- 一、歌舞音曲に溺れたり三味線を手にしてはならない
- 一、家伝の計を怠らぬこと

そして又大関家の『女人心得』(七訓)には次のようにある。

- 一、華道は家元池坊 茶道は石州流を修得のこと
- 一、謡は喜多流 琴は山田流を嗜むこと
- 一、書は万よらかな書きのこと
- 一、薙の小太刀の手入れを怠らぬこと
- 一、大和朝より鎌倉に至る間の物語・歌集より数葉を学ぶこと
- 一、大日本史を潘くこと
- 一、針を持ち厨に立ちて上手なること

水戸藩士族の質素儉約といった古いしきたりや慣習も入っているようである。

詩は祖母の最期を看とり、亡くなって行く深い悲しみを背負い、その悲しさが「妹よ」「妹よ」と呼び掛けることで強く伝わり、更に「落ちてゆく」と死を比喻することによって悲しみが一層深まる。詩集のこの後には「四月三十日」と題され、祖母の最期が書かれ

た作品が掲載されている。妹の名はさく子とある。

いまは郊外の朝です

私の机の

水仙の花がほんのり匂ひます

窓をあけたら

向うの屋根に雀がゐて

何か相談してゐます

うちの祖母さんは

まあるい大きな眼鏡をかけて

にこにこ新聞をひろげました

おかめのやうな私の妻は

桃太郎さんをうたひながら

お勝手で働いてゐます

私はたのしく

重い書物をとりあげました

太陽がしみじみと
いまは郊外の朝です

水仙、雀と穏やかな春景色を表出。新聞を読むことの好きな祖母、妻は仕事をしながら大きな声で童謡を歌っている。作者の気持ちは「たのしく」そして幸福感を表現する太陽は燦々と郊外の小さな家を照らしている。日常生活の中でのなんでもないことに幸せを感じ取っている。家族の普通の生活というものすばらしさを実感した表現である。

日常の身边を題材にした作品には、読む者の心にはのぼのとした人間的な温かさ、ぬくもりを感じさせるものがある。

都のはて

都のはての
いまはひるすぎ
古道具屋の店さきに
梅干のやうな赤ん坊が
盛んに泣きつづける

三十五六の父親は
あきれたやうな顔をして
走る電車を眺めてゐる

おお そこに
お天道様はしんみりと
光をあたへてゐらつしやる

東京郊外の古道具屋の昼下がりの情景を写し出したものである。生まれただばかりの赤ん坊を「梅干しのやう」と比喻表現する。父親は赤ん坊の止まない泣き声にあきれかえっている「お天道様」である。太陽は作者にとつては幸福感の象徴である。何でもない通り過ぎて行つてしまふような日常生活の中の光景に詩人の感性が働く。

三月

芽をふく枝で
母恋し
私とおなじ
旅の鳥

梅に鶯で、鶯を擬人化し、ストレートに母を恋う。この裏には癒

しと言うキーワードが隠されていてよう。母をテーマにした詩を書くことによって、心の空白に母親の愛情を埋めつくそうとしたものであろう。ここに大関五郎の詩作の原点がある。

晝

あおのつめたきに
ははをしたい
あおのあかるさに
ひとをおもひし
せうねんのわれ
いまぞなつかし
いやすみわたる
おほぞらの
そのあかるさに
ひるのつきありて
けがれしもの
こころさびし

題名のみが漢字で本文は総てひらがな表記として、過去を回想し

たものである。童謡詩集『星の唄』にも同題で帰らぬ母を待つ子の寂しさを書いている。

空の青さに冷たさを感じ、その冷たさから生別した遠い存在の母を慕う。そして又、空の青の明るさから母を思っていた少年時代の自分が今となってみれば大変に懐かしく思われる。青は五郎にとっては特別な色である。素晴らしく澄み渡った大空のその明るい中に、真昼の寂しさを象徴する昼の月があつて「けがれしもの」は作者で母親に育てられなかった自分を卑下し、寂しく思っている。

大関五郎の作品には母のいない孤独の詩が多い。孤独で寂しさの根本的理由はいつも母にあり作者の心には必ず母がいる。そしていつも母の影があり、どこかでその面影を追っていると同時に、五郎にとって生きている実感を感じ続けるのは、いつも母が心の中にあるからである。本当の寂しさを知っている作者の優しく情緒豊かな詩の世界が読む者の心に響いてくる。

平和

ゆくくもがかげをおとす
あおくさはらの
うばぐるまに
こどもがひとり

まつしろなかうもりのかげに

ほほゑみほほゑみ

ゆめぢをたどる

紺碧の大空に流れ行く雲が太陽を遮り、青々とした草原に影を落とす。と、視線が空から地上へと移る。乳母車に乗った子供は作者の理想の化身で、純白に身を覆われ、優しい母親に見守られ微笑みながら夢路をたどっている。作者の幼児期の理想像でもあったであろう作品である。

VI 民謡の周辺

大関五郎の民謡集は二冊出版されている。一冊は『煙草のけむり』で、大正十五年四月十六日に本郷の素人社から発刊されている。その概要は、序文を野口雨情が書き、三部構成になっている。―死ぬに死なれぬ―では「杯もつて」以下二十二編、次に―思ひきるとは―以下十六編、最後に―ちんちろりん―十四編の合計五十三編を収録している。

作品の題材は、女給、芸者、酒場の風景、恋愛、門付け、旅芸人、電車内の風景等バライティに富んでいる。時代を写し出し、底辺に生きる者へ常に温かい微笑みを注いでいる。昭和三年には日本民

謡協会が結成され、雨情と共にこれに参加した。昭和五年、上野の三宜亭に於いて「茨城詩人の集い」が開催された。主な参加者には清水橋村、野口雨情、多田不二、市毛大成、本沢浩二郎、関沢潤一郎、飯島匡孝、森田麦の秋、山口義孝、山口斌、下条綾子、柳橋好雄、塙義幹、野口茂夫、小森盛、羽方輝江、佐々木すぐる、大関五郎等であった。山口義孝によると「大関、柳橋が発起して、茨城詩人の集いを企画。眼目は夜雨と雨情を一緒にすることであったが、夜雨の不調で小森盛が背負って出たが中止したとのことであった。」夜雨と雨情の童謡論争に関わるものであったのであろう。茨城詩壇がこの当時ほど盛り上がったことはその後にはなかったと話されている。

もう一冊は『大関五郎民謡遺稿集』で、昭和四十六年五月二十日に大関五郎詩碑建設委員会の代表山口義孝が出版した。あとがきによると「これは俺の生命だ、と大切に大切にしていた『新日本民謡』を片はしから破りすて、その中から数十編を選んで、これを清書してくれ、ナンバーも俺のうった通りにするんだ。と言って渡したが、この遺稿集です。これは俺の民謡の決定版だ。お前の手を出せる時が来たら出してくれ。」と遺言されたものであった。

収録された作品は、雑誌『新日本民謡』に発表したものの中から選んだものであった。『新日本民謡』は昭和六年十月に創刊号が刊行された。この頃は民謡の台頭期であり、低俗な民謡を書くことに

五郎は憤慨し民謡は詩でなければならぬと決心し、貧困の最中、異常と思われるような熱意で、新しい芸術民謡を提唱した。北原白秋、横瀬夜雨、野口雨情、伊良子清白、佐藤惣之助等の民謡を巻頭に掲げ、民謡の刷新を図った。

人々に民謡の理解と作品の発表の場を提供し「これは俺の一生の仕事だ」と言い、後進の育成に力を尽くした。これは企画としても成功を収め雑誌は昭和十一年二月までで、四年五か月。冊数も五十冊を数える。雑誌の編集所は、初めは石神井に置いたが、鷺宮に移り、後藤八重子女史を編集助手にして一層の事業の発展を図った。

川野辺精は昭和六十三年二月二十二日から『新しいばらき』新聞に「芸術民謡詩人の先達・大関五郎とその周辺」と題して七十六回に亘って連載された。その始めに「有為の才を抱きながら貧困の極みと闘い、若くして逝かれた純粹と情熱の詩人・大関五郎の霊を、幾分なりとも慰めることができるとともに、彼の偉大な存在を多くの人々に知っていただければ」と書き「幸い、私の手許には、彼と親しく交友し、いまは故人の塙義幹が、私のために書き遺してくれた手記の写しと、私の詩友で若くして他界した平山微妙が、死の直前、私に永久保存を命じて託した大関五郎の努力の結晶『新日本民謡』全巻、それに私が秘蔵している若干の著作や記録などがある。」と書かれているが、志半ばにして完結することなく平成二年四月八日に亡くなられた。

その後の平成九年の二月に長女の公子さんに連絡をとり『新日本民謡』の閲覧願いを申し込んだが、遺族の許には無いとのことであった。

遺稿集に収録された作品は五十四編であるが、制作による年代順の配列ではない。巻頭におかれた「ひる」は昭和七年の三月に発表されたものであった。

ひる

なびくみづぐさ

あおあおなびく

みづのながれの

ゆるやかに

すてよすてよと

わたしはきたに

けふのうつつが

すてられぬ

たなごまつよな

たなごのかけが

すなにしづかに

およいでる

五郎自身が、よく口ずさんでいた作品を二編程掲載しよう。

苗売り

青い空から

こぼれて来たか

苗を担いで

苗売りに

来たか、あの声

男の声よ

寂し寂しの

寂しさに

白い花咲く

へうたんの

苗をしんみり担いだか。

独楽

叩きつけたに

しんしん澄んで

独楽が澄んでる

冬の土

いつかほのぼの

大人を忘れ

おれがとろりと

とろり、とろりと

澄んでゆく

敵も味方も

無邪気であつた

幼な友だち

おれの友だち

どうしてる。

長男の鈴夫さんによると、中年期頃の石神井時代の作品であろう
とのことである。「父が口ずさみ、私が暗記しているものですから、
好んだ作だと思えます。」と語られる。

次に親心を書いた作品を載せよう。

おてんとさん

両手おつぴろげて

抱きしめたらば

わつと泣くかよ

声あげて

今日も

お空に

おてんとさんは

ひとりぼつちで

光つてる

揺れる葉鶏頭

揺れる葉鶏頭

泣く子に見せる

いまは静かな

親ごころ

百舌鳥が啼きます

夕焼小焼

百舌鳥が啼きます

はるばると

わたしや里親

ねんねのお守

いつかこころが

濡れてくる

時間を越え、空間を越し、何時の時代や、どこにあっても親と子
の絆は強い。大関五郎にとっても親子の関係は大きなテーマであっ
た。

おまん狐

城下はずれの

さらさら霽
おまん狐が
紅つけた

たよらない身に

さらさら霽

化けるつもりぢや

なかつたら

城下はずれの

さらさら霽

おまん狐が

より添つた

水戸の侍

さらさら霽

情知らずぢや

なかつたら

この作品は昭和六年十月の『新日本民謡』創刊号の巻頭を飾ったものであった。後に『大関五郎民謡遺稿集』に収められた。

水戸城下の外れにさらさらと霽が降る。そんな夜、あまりにも寒く寂しいので、人恋しく寄り添おうとして、狐は紅をつけた女性に化けて表れる……

その昔、南町通りは、大変に草深い所で、首を晒した所もあったらしい。『水府あきない物語』（平成六年十一月 後藤卓三編 南町商店街振興組合）にも「カヤぶき屋根がチラリホラリ 狐の啼き声 がきこえた南町」とあり、明治の初め頃でも、南町通りには、狐の啼き声が聞こえたと言われている。又『明治大正の水戸を行く』（昭和三十四年三月 前田香径著 いはらき新聞社）には「銀杏坂は九分通り南三ノ丸に属している。その坂の切り開かれたのは明治二十一年で、それまでは県庁前の空濠は坂のところまで延びていて、三ノ丸から東照宮にいたる一帯は杉森であった。（中略）市役所前の道路べりに銀杏の大木が一株茂っているが、これとてその昔「おまん狐」が毎夜火を燃やしたという老銀杏のそれではない。」とも書いている。『泉町物語』（平成七年八月 望月安雄著 泉町商店会）には「中央郵便局前の広場は明治十六年に銀杏坂に切通しが出来て南町とつながるまで、そこをふさいでいた土手をくずして堀を埋めた跡で、土手西片側は今も県庁前に残る空堀がここを南方に横切って、水戸城防衛の第一の外堀となっていた。」とあり、現在の南町一丁目辺りには外堀があった事を書いている。

『水府異聞』（平成元年三月 網代茂著 新いばらきタイムス社）

によると「水戸城下のどまんなか、今の銀杏坂あたりから水戸東照宮の常葉山にかけて、うつ蒼とあった杉の森、ここに棲んで人々を化していたのが『おまん狐』。赤ん坊の夜泣き止めに靈験あらたかの『おまん稲荷』の祠が戦前まであった、という。」前にもあるように切通しの坂が開かれ南町と柵町が繋がったのは明治二十年であった。続けて大正十年前のホテル大平館のベランダから見た銀杏坂方向の写真を掲げている。写真には現在もある右手の銀杏の大木や左手には現在では開発されてしまった東照宮常葉山の杉の巨木の森も見ることが出来る。そして「この森にあった一間四方の稲荷祠、その近くの深いヤブに穴籠りしていたのが『おまん狐』だと伝えられている。夜泣き鎮めの神とあがめられ、丑の刻参りを三晩続けることとたいの夜泣きの子は止むとあって町の人々はこの『おまん稲荷』によく詣でたという。昼なお暗く滅多に通る人のない森の中のあるかないかの間道、下市へ急ぎ帰る時など人々はこれを利用して。『おまん狐』はそこをねらった。」とある。

稲荷社は各地にまつられており、屋敷神を含めると、全国で五万を越えるであろうといわれている。お稲荷様ほど人々に信奉されているものはないであろう。そしてそのお稲荷様の神使が狐である。稲荷は稲霊信仰と結びついたもので、稲の神は別に御食津神ともい、その音から三狐神とも書き、狐が稲荷そのものとも考えるようになった。中世以降、工業や商業が盛んになると共に稲荷信仰も農

耕の守護神だけではなく、武家社会や町家までも広がり、屋敷神としてまつられるようになった。『神道大辞典』（平成二年七月臨川書店）によると「関東では紀州藩の小吏から食邑五万七千石の大名、老中となった田沼意次は稲荷を居宅に祠つたから出世したということから信仰が広まったといわれ（中略）寺院に於いても白晨狐菩薩を稲荷と祠り、災を除き福を授ける開運の神として宣伝された。」とある。

天保時代の水戸の地図によると現在の銀杏坂辺りは、駅前から市内に向かつて右手の手前東側に笥助大夫、奥の西側に松平主書殿の屋敷があり、次に左手の南側手前には伊藤三郎左衛門の屋敷があり奥には森に囲まれた東照宮がある。

当時千石の笥助大夫の屋敷神としてまつられたのであろう。現在でも元の屋敷名をとって残っているのが南三の丸に鎮座する「笥稲荷」である。奥の西側は水戸中央郵便局となっている。左手南側は七百石どりの伊藤家の広い屋敷が続く、この裏手に稲荷があったといわれる。屋敷神の祠は普通屋敷の西北にまつるものとされているので、方角から見ても伊藤家で祠を設け稲荷を勧請したものである。時が流れ屋敷神が地域の氏神に昇格するように、夜泣き鎮めの神とあがめられ、丑の刻参りを三晩続けるとたいの夜泣きの子は止むとあって町の人々は、このおまん稲荷に良く詣でたのであるう。

『水戸秘譚』（斎藤新一郎著 昭和十三年十二月）には「銀杏坂のおまん狐」と見出しがあり、サブタイトルに実見者北川北仙氏談とある。次に概略を部分的に引用したい。「この祠を中心として牝狐が一疋穴籠りしていた。別して悪戯もしないので街の人も構はなかつたが偶々化かされる人が有つた。其当時は今の坂でなく郵便局脇に細道があり小山田屋敷前から柵町柳堤、下市に至るので極淋しい場所ではあるが上市と下市の連絡道の緊要の地で人通りが多かつた。」とある。

昼間でも暗く森の中の坂になった間道は、下市方面に行き来する場合旧銀杏坂の通りを二辺とすると、一辺だけの直線となり、近道であつたらうと推測することが出来る。下市へ急いで帰る時にはこの道を利用したのであろう。おまん狐はそこを狙つた。

おまん狐の話は二つ挙げられているが、その一つが大関五郎作の「おまん狐」の詩のモデルとなつた話である。このような話は明治維新以後までも流布していたようである。

下市藤柄町荒物店館屋の主人が上金町の親戚の結婚式に招かれ充分にご馳走になり、御土産や膳部の引物を幾包みも下げて酔眼朦朧として千鳥足で、この稲荷社の前まで来ると、後ろからスタ／＼と草履の足音を立て、年増の女が近寄ってきた。この時館屋は、こゝは狐の出る所だと気がつき、包み物を欲しくて女に化けて出たと考え、女に向かつて包み物はお狐さんに上げますから私に近寄らな

いで下さいというと、女はエエ私何も欲しくありません。余り寂しいのでお同道願いたいです。下市藤柄町まで行きますというので館屋は益々自分を馬鹿にしていると思ひ、無理やりに包み物を女に預け一目散に帰宅して寝てしまった。明けて翌朝は年越しの日、店先を掃除していると昨晚の年増女がヒョッコリ入つて来たので驚いた。館屋は、今度は逃がさないぞと裏へ入つて棒を見つけている内に女は何処かに姿を消してしまった。

小学館の『日本国語大辞典』によると「おまんがべに」という言葉があり、江戸時代の享保の頃、江戸の京橋中橋にあつたお満稲荷で売つていた紅粉のことをいうとある。又「中ばしにおまんいなり」とて、べにを供え願がけする社あり、享保の頃はやれりといへり」とあることによつて他にもおまん稲荷の存在があつたことが知られる。

詩の中の「たよりない身に」はたよりとして身をまかすことのできるものがないということ、よるべきものがなく、孤立して心細い状態であることの意味。ここにも作者の心情が窺われる。母のいない五郎は幼児期には夜泣きをして祖母を悩ませていたのかも知れない。幼児体験の回想も含まれているのかも知れない。大関家では、婆やの名前に「おまんさん」が出てきたり、坂の名前にも「おまん坂」という言葉が使われているように、祖母や婆やの昔話の中から創作されたものであろう。愁いを含み可憐で叙情的な作品で

ある。

『水戸を語る』（昭和六年十月 前田香径著 水戸を語る出版会）の中でも「維新以後迄『銀杏坂のおまん狐』といふ狐が住んでゐた事は有名な話であるが、それは長五郎狐の間違ひであらう。この狐は悪戯が好きで瘦々人を化かしたさうであるが、昔はこの邊一帯藪で現今伊藤鹿次郎さんの住んでゐる下の藪豊にも狐の巣があったりしたものである。」とも書いてあるが、長五郎狐については不明であり、雄狐の話は聞かない。いずれにしてもこの辺りには狐が住んでいたことは確かなことであろう。

最後に稲荷と直接に関係したことはないが、狐と男が結婚するという狐女房の伝説は各地に残されている。その中でも有名なものは「葛の葉」の物語であろう。『芦屋道満大内鑑』と題され元文二年三月に江戸市村座で歌舞伎化された。初演はその三年前に大坂竹本座で上演されている。大阪の信太森の白狐が安部保名と契り安部清明を生んだという「信太妻」の伝説が題材で、安部保名と芦屋道満の相統争いで保名の恋人榊の前は岩倉左大将らの陰謀で自殺をしいまい、これを悲しんで心狂った保名は榊の前の妹葛の葉の介抱で回復することができた。岩倉の家臣が白狐を狩るが、その狐を保名が救う。保名は葛の葉と夫婦になり一子童子を設けたが、この葛の葉は白狐が化けたもので、六年後、真実の葛の葉が訪ねて来ると、童子に名残を惜しみ「悲しくば尋ねきてみよ和泉なる信田の森

のうらみ葛の葉」の歌を残して古巣へ立ち去るという内容である。「葛の葉子別れが」眼目であり、こゝに大関の心情には幼き日の母と生き別れになったこと、重なるものがあつたらう。又、当時東照宮常葉山の杉の巨木の森の中にあつたおまん稲荷が夜泣き鎮めの神としてあがめられる理由もこゝに由来するものであろう。

大関の「おまん狐」の詩は当時の民謡詩壇に於いて、傑作中の傑作と称えられ、佐々木すぐるの名曲によつて宣伝されたが、大関自身は何故かこの曲を口にするのをしづめていたらしい。寂しかった幼児期を思い起こすことがつらかつたのであろう。

おまん稲荷の現在は宮町二丁目三十一の富士ビル内四階に鎮座されおまつりされている。長谷川實さんがこの稲荷を復興されたのは、三十年程前のことで、昔このあたりにおまん稲荷があつたということを聞き、古い地図で見るとこのあたりには伊藤主殿の広い屋敷が続き、稲荷はこの裏手にあつたということを知った。同じ敷地内でもあるので、旧ビルの頃は屋上におまつりしていたが、新ビルになって現在に至り、今は四階の東向きに鎮座し銀杏坂の繁栄を優しく見守っている。

立川小唄

忍び泣くよな春雨晴れて

(一)

吹くよそよ風、武蔵野に
朝日うらゝかスポーツ日和
空の都よ、立川よ。

東京ばかりか浅川青梅 (二)
五日市から、一と走り
汽車だ電車だ川崎からも
空の都よ、立川よ。

飛行五聯隊ありや格納庫 (三)
ほんに技術部、さしむかひ
こゝは日本の飛行機の名所
空の都よ、立川よ。

鳩か蜻蛉かあのサルムソン (四)
飛ぶよアプロ機、ドルニエー機
シヤンがすましてフォツカーに乗つた
空の都よ、立川よ。

可愛い兵隊さんだ明るい朝だ (五)
ほんに強そな、重爆の

ろゝんろゝんとプロペラ廻る
空の都よ、立川よ。

飛行学校かみくにの人か (六)
なぜかお話し、してみたい
春の日永の日が暮れかゝる
空の都よ、立川よ。

月に浮かれた夜鴉ぢやなし (七)
赤い電燈が、尾を引いて
夜間飛行のありやサルムソン
空の都よ、立川よ。

春はよいもの狐の思案 (八)
昔戀しい、ふじ塚で
今夜化けよか明日にしよか
空の都よ、立川よ。

雨を降るなよ櫻が咲いた (九)
嬉し約束、ほごになる
明日は普濟寺あの花祭り

空の都よ、立川よ。

いつか浮名の流れて咲いて (十)

人目忍ぶよ、蛇の目傘

すきじやとらないこの左棲

空の都よ、立川よ。

朧月夜のチラチラ灯 (十一)

芝地通れば、なつかしや

戀の花咲くキネマが見える

空の都よ、立川よ。

(中略)

わたしや夏帯さらりとしめた (十五)

今夜嬉しい、蛍籠

さげて行きましょ立川田圃

空の都よ、立川よ。

揺れる蘆間によしきり鳴いて (十六)

眺めはるかな、富士の山

けふは根川で鮒釣りましたよか
空の都よ、立川よ。

誰か忘れたきれいな帯を (十七)

しかも田圃の、まん中に

なんの中澤月夜の川に

空の都よ、立川よ。

(中略)

日本晴だよ法螺貝が鳴る (二十四)

うちの太郎は、棒使ひ

笛だ太鼓だ獅子舞が来る

空の都よ、立川よ。

見ろよ舞込み雌獅子と雄獅子 (二十五)

「松にからまる、蔦の葉も」

歌はよいもの獅子舞歌は

空の都よ、立川よ。

五六十ちやまだ年や若い (二十六)

太鼓叩いて、秋祭り

可愛いがられるあの諏訪さまに

空の都よ、立川よ。

雪の大山丹沢秩父

(二十七)

晴れりや輝く、冬の富士

こゝは普濟寺咲く寒椿

空の都よ、立川よ。

大関五郎作詞、田中豊明作曲(ピアノ曲) 町田嘉章作曲(三絃曲)
花柳徳之輔振付による「立川小唄」は、昭和五年四月十日に立川二
業組合と立川キネマの主催によって披露された。作曲について、一
つの歌詞に二種の作曲は、すばらしい所産であるとして、一は洋楽
に相応しく、一は和楽に適しており各々佳味特色を持っているので、
折節の気分に応じて歌って下さいとある。しかし実際には曲は初め
新宿にあった帝都座の楽長であった田中豊明がつけたが、オーケス
トラを主としておりメロディーが三味線に乗らず、芸妓衆の反対が
あって、改めて町田嘉章に依頼して作曲してもらったのが実状であ
った。

『西武新聞0425』(昭和五十年十二月 十二号、昭和五十六
年一月 十七号)によると、この頃立川に新しい民謡を作ろうと提

唱したのは原田重久や鈴木貞治で初めは歌詞を公募したが実らな
かったので、原田の師である大関五郎に依頼して作られたものであ
る。歌詞は一番から二十七番まであり、季節感をとらえながら春の
桜、夏の蛍、秋の祭り、冬の雪山と続いている。歌詞があまりにも
長かったためであろう初めは十一番までであると説や、七番ま
でであると説等が出てきて、その後いつの間にか唄いふやされ
て現在では二十七番までになっている。などと間違つて言い継がれ
てしまった。三絃曲を歌う場合には各歌詞の末尾に「わたしや飛行
機風まかせ お前のでやうで宙返り オヤクルリトセー ション
ガイナ」囃言葉を付加することとある。比喩表現を用いて草創期の
飛行機の様子と女性の心をうまく捉えている。

大正十三年五月には、立川に陸軍飛行第五連隊が駐屯し、それま
での麦畑や桑畑が続いた土地には飛行場が出来、活発な町へと変貌
して行き、昭和四年七月には、日本航空輸送株式会社が、立川と大
阪間、立川と新潟間に日本最初の民間航空路を開設した。空の都と
なった立川は一層活気に溢れた街となった。『立川小唄』が作られ
た前後には、多摩地方にも府中小唄や八王子音頭といった花柳界を
背景に歌われた新民謡が生まれた。この頃、西条八十作詞による『東
京行進曲』や時雨音羽作詞による『神田小唄』等が流行り、これら
はご当地ソングのはしりというものであり、各地に影響を及ぼした。
『立川小唄』制作の関係者である大関五郎、中島薺司町長、並木

筆三郎、鈴木貞治教育委員長、原田重久のメンバーはその当時立川市内には一台しかなかったというタクシーに乗って作詞のために市内を一巡し、普濟寺にて白川至敬師を交え記念写真を撮影したということである。立川印刷所発行による『民謡立川小唄』の小冊子に掲載されている写真は、その時の写真であろう「大関五郎先生（於普濟寺）」とある。山高帽子に黒マント姿の大関が写っている。普濟寺は九番と最後の二十七番に春の花祭りと冬の寒椿として二回出てきているので余程印象が良かったのであろう。作品の中では、自然が豊かに表現され「鳩」「蜻蛉」「鴉」「狐」「螢」「よしきり」「鮎」の小動物も出演している。十七番の月夜の川を帯に例える感性は大関ならではのものであろう。「空の都」といわれた立川の一つの時代を写し出した唄であった。

昭和二十年には、大関五郎は家を挙げ遠縁をたよって宮城県松山町へ疎開した。雑誌は戦争の影響を受け刊行が困難となり、止むを得ず廃刊として、戦禍を避けて家族の安堵をはかった。しかし終戦を迎えて間もなく病気に罹り、昭和二十三年八月三十日五十四歳の生涯を閉じた。死が迫った頃、五郎は聖書を読みたいと、しきりに言ったという。八重夫人は仙台まで出向き、一冊の聖書を求めて枕辺に置いたといわれる。若き日の水戸での「苦惱者」時代を思い起こしていたのであろう。新鳥見町の五郎の家に集まった若者達は、夜を徹して文学を語り明かしていた。五郎の創刊した『新日本民謡』

から巣だった新進詩人には五味清花、野口茂夫、太田明、土屋三三男、関根九雀、小林ひろし、阿蘇華一等の人々がいる。

Ⅶ 親友・新堀紅泉

大正時代に新聞『いはらき』の「木星」欄で活躍し、その名を当時の茨城歌壇に轟かせ夜雨門下の四天王の一人として高く評価された新堀紅泉の生涯はどのようなものであったか。そして又大関五郎との交友について見て行きたい。

平成十二年六月の土曜日に鹿島郡鉾田町の生家を訪ねようとしたが、なかなか見つからずこずってしまった。県立図書館等で県内の人名辞典や文学関係の人名を調べてもその名前は出てこない。そこで新堀と言う名前の多い鉾田町に焦点を絞ってみた。

鉾田町では先ず図書館を訪ねた。名前を聞けば生家はすぐわかるであろうと思っていたがわからず。二階の郷土資料室を見せていただいたが、それらしいことはどこにも載っていないかった。結局は受けの脇にあった電話帳の新堀の氏名の部分をコピーして新堀の名前の多い鳥栖地区を訪ねた。しかし何軒尋ねてもわからなかった。諦めて車に乗る暫く行くと下富田地区の方が道路脇の広場でゲートボールをやられていたので車を降りて聞いてみた。直ぐにわかって「村長の家だよ」「醤油屋だよ」と教えていただいた。私が車

に乗り込むと、親切な小柄の男性の老人が車の所まで来てくれて詳しく説明していただき「しばらく行くと上富田の十字路があり、その左側に店があるのでそこでお聞きなさい。」と丁寧に教えていただいた。

紅泉の生家は、菅野谷であった。去年は小川町出身の詩人清水橋村について調査のため数回にわたって巴川流域の大和田や下吉影を訪ねており、小川町の図書館で清水橋村の生誕百二十周年を記念した催しを開くことが出来た。

新堀家には突然お伺いしたにもかかわらず、夫人は丁寧に話をしてくださり資料も見せていただいた。ダンボールの箱に入った資料は銚田町の町史編纂の資料として調査され、整理されていた。概略見せていただき、後日再度見せていただくことにした。

二度目に訪問したのは、お盆も終わった八月十九日であった。今回は特に写真や書簡や履歴に関する資料を写真に撮らせていただいたりコピーをさせていただいた。中でも大関五郎からの便りの数には驚く程であった。葉書が約百二十枚と封書が十通もあった。参考までに夜雨からは二通、暮鳥からは十二通、雨情からは七通であった。その他沢山の手紙類が大切に保管されていた。

現在「木星」の四天王と称された歌人の中で神戸節や森田麦の秋の二人については比較的整理されまとめられている。神戸には『筑東集』（昭和四十五年）があり、昭和五十年には歩崎観音岬に

歌碑が建立された。森田については吉田登美穂編による『歌人村長 森田麦の秋作品集』（平成五年）が出ており、歌碑も平成四年に竜ヶ崎文化会館前に建立された。この二人については木村修康によっても「ふるさと文庫」『茨城歌人列伝二及び三』（昭和五十六年）の中に詳しく記録されている。大関五郎については上京し、特に中央の詩壇で活躍したことによって、文学辞典等に明記されており、最初に大関の評伝を書いたのが塙義幹であった。研究としては川野辺精、西條和子が調査を進めている。

新堀紅泉については、昭和四十年四月四日の『週刊てんおん』に木戸清平が追悼文を載せ、稲葉義司郎遺稿集の『白明歌集』（昭和五十年）の中には「新堀紅泉をおもう」が載り、小野勝美は『解釈』（昭和五十一年九月）に「山村暮鳥と鹿島の歌人新堀紅泉―暮鳥未発表書簡―」を発表している。銚田町史編纂では中根誠が「銚田の文学」の報告及び「銚田の文学」資料展目録を作成しており、その中で新堀紅泉を取り上げている。

新堀は生前一本に取りまとめた著作が無かったためにその文学的な業績は、一般には知られることはなかった。かつてはその名を「木星」の四天王の一人として知る人も多かったが、作品が手に入らない現状では益々忘れ去られてしまうことであろう。初出の雑誌や当時の新聞を閲覧することは、研究者であっても難しいことである。新堀紅泉の文学的な業績については集大成されていないという

のが現状であろう。

履歴書によると本名は昌。明治二十二年八月二日に茨城県鹿島郡巴村大字菅野谷一〇六〇番地（現在は鉾田町大字菅野谷一〇六〇番地）に父亀吉、母みわの長男として生まれた。夏の暑い日であった。新堀家は藤原氏の系統で、吉影城主から分家し、初代の当主は与左衛門と称し、事後与左衛門を世襲し、昌の代で二十六代目となる。近在きつての素封家であった。初代は次男の吉兵衛を延享元年（一七四四）に分家させている。

昌は明治三十六年三月沼前尋常高等小学校を卒業し、水戸の私塾に通い漢籍を学んだ。若くして家業を継ぎ、その人柄は清廉で慈愛に満ち清雅であった。大正五年には若干二十七歳で巴村の収入役に就任した。大正七年には村の助役に就任、大正十四年には村議会議員、昭和七年から同十九年まで村長に就任した。昭和三十年からは鉾田町の教育委員となった。その他警防団長、農業会鹿島郡支部長、巴村農業協同組合顧問、巴川沿岸耕地整理組合理事、巴中学校及び巴第二小学校顧問等の要職を歴任した。家業に於いては新しく醤油醸造業を創業し繁栄発展させた。老後は趣味の書道に余生を送っていたが昭和四十年三月二十一日に突然亡くなった。

短歌の創作については、明治四十三年、二十二歳の時に「白菊会」に入会して金子薫園の指導を受け、翌年の七月からは前田夕暮の白日社に入会し『詩歌』創刊からの同人となった。大正八年頃からは

公務多忙のため作歌からは遠ざかったが、昭和三年四月の第二期の『詩歌』には復帰した。一方地元では新聞『いはらき』『木星』の同人となった。

大正七年一月六日水戸市の偕楽園の好文亭に於いて「木星記念集会」が開かれた。前年の暮に夜雨から会への誘いの葉書が届いた。しかし結果的にはこの会を通して茨城の詩歌壇の人々の新しい文学活動が展開されて行くことになる。

自分の巢

夜半

吸はる、様に急いで帰って来たわが家

声かけながら雨戸を繰つてはいれば

寂しくともるらんぶ

静かに垂る、青蚊帳

蚊帳の中には

枕を並べて休んだ子供等の傍らに

自分の帰りを心に待ちつゝ、

まだ襷姿のまゝでいつか眠りに落ちてゐた妻

「休んでをてすみません」と

疲れきつた体を半ば起こした

眠むさの中にあふるゝ悦び

すや／＼ねいる二人の子供をゆりおこし

私は懐から一包みの菓子を与えた

あゝ尊いこれが自分の巣だ

妻よお前もゆつくり襷をはづし

帯をほどけ

さらばみんなで安らかにねむらう

『苦惱者』（大正八年十二月）十三号に発表された紅泉の初期の詩である。暮鳥は十二月十六日付けの葉書で「苦惱者のあなたの詩をよんで自分は泣きましたしみじみとあなた達のおくつてゐる日々がおもわれます。歌集の『野草』はどんなはこびになつてゐるのです。」とある。妻つきは大正七年一月九日に病気で亡くなつてしまつた。過去を懐かしみ、今は亡き妻を思慕する気持ち素直に作品化されている。葉書には歌集とあり、暮鳥に序を依頼して出版には至らなかつた。

ひばり子

あのひばり子はどうしたる

桐の畑のあれ草に

ひとつぼつとり巢をかけた

あのひばりごはどうしたる

草とり鎌のかま先に

はつと気付いて置いて来た

あのひばりごはどうしたる

今日は朝からしとしと

雨がふるのに野の中で

『郷土』（大正十二年五月）第六号に発表された。七五調で軽快なりズム感があり、あ音を六回も重ねることによつて更に言葉の調子が良い。作者の優しさが窺われる。生前「私はただ自然と時代の中に自己を見いだし自己を養い…出来ることなら自然の中に溶け入り自己と自然と一体となりたいと思つてゐる。」と語つていた。友人の前田香径は『週刊てんおん』（昭和四十年四月 五三三号）「新堀紅泉を憶う」の中で「ともあれ、新堀紅泉の名はずいぶん古くから歌人の間に知られてゐる。私と往来するようになってからも、すでに四十年はすぎている。」と回想している。

現在昌男宅には、稿本として八冊程保管されている。主なものは詩集『小鳥のさゝやき』歌集『野草』『旅すがら』等がある。地元に残された作品には「菅野谷音頭」「巴の唄」「巴音頭」「巴校歌」等がある。交友の記録としての写真資料にも貴重なものがあり、大

正七年一月の「木星記念会」や暮鳥の「風は草木にささやいた」の出版記念会そして五郎の「寂しく生きて」の出版記念会等の写真がきれいに大切に保存されている。

昭和二年五月二日、大洗子ノ日原の松林の中で暮鳥の詩碑の除幕式が行われ、新堀はこれに誰よりも喜んで参列したといわれる。この詩碑建立の発起は大正十五年三月であり、高井能、柳橋好雄、大関五郎が中心となって進めてきたが、いざ石材店にお金の支払いとなった時に支払額が不足してしまった。建設委員であった大関と柳橋の二人は、新堀に電報為替で金百円の送金を依頼した。大金百円は簡単に出せるような金額ではなかったであろうが、窮状を知った新堀は見捨てて置く訳にもいかず送金した。そしてこの事は誰にも語ることはなく、詩碑は立派に建った。この新堀の尊い友情に敬意を表したい。表面的な友人との付き合いを遥かに越したものであることに感銘を受けた。

次に新堀紅泉の書いた「大関五郎君を憶ふ」〔茨城随筆〕二巻二号 昭和二十四年三月一日を転載したい。二人の温かい友情を披歴され、真の友情を育み、心の友であった一端を垣間見ることが出来る。

大関君、君はとう／＼この世を去ってしまったのか。無常迅速の世とは云へ永い間の交友であつた君の、厳肅なる死といふ事実の前

に直面して私は余りにもはかなく悲しくなつてしまふのだ。

私が君と初めて相知つたのは三十年以上も前のことだつた。それは地方に於ける「木星」と中央に於ける「詩歌」とが仲立ちとなつて結ばれた縁であつた。加ふるに山村暮鳥氏を中心とする「苦惱者」などが出て鳥見町の君の家にはいつも県下の文学青年が集まつて恰も梁山伯の感を呈した。或るいは詩を論じ歌を語り或るいは呑み且つ騒いだ。当時二十代の血の燃え立つ青年達のかうしたグループが如何に元気で愉快なものであつたかいふまでもない事であつた。思い出の糸を手繰ればそれからそれと限りもなくつゞくであらう。

さうかうしてゐるうちに君の心境は変化した。水戸を引き払つて東京へ出て行くことになつたのだつた。内心大いに野心があつたのであらう。去るものは日々に疎し、それ以来音信も絶え／＼になり勝ちだつたがお互いの胸の中にはいつまでもたつても心と心が通つてゐた。二年も三年もたつてからひよつこり手紙が来たり亦こちらからもやつたりした。或る時はふらつとはる／＼東京から風の如くやつて来たこともあつた。こちらからも亦序ではあるが突如として訪ねて行つたこともあつた。そして昔がたりに花を咲かせることが常であつた。日本が太平洋戦争にまで突入して空襲がはげしくなつて来た時（終戦六か月前頃）私は心配になり出して鷺宮宛に手紙を出した所が付箋が付いて戻つて来てしまつた。私は何處かへ疎開でもしたかそれ共どうしたことだらうと思つてゐた。纏て終戦となり

世の中がごたついてゐる最中（二十一年三月）宮城県の松山町といふ處から長い手紙がひよつこり届いて来た。

どうしていらつしやるかといつも思ひ出し乍永いことご無沙汰しました。みちのくにも春が来てといつても昨日は雨今日は朝から雪が降つてゐました。いまはからりと晴れて雨だれの音がしきりです。小生はこの町に来て二度目の春を迎へました。終戦前年の暮まで東京で頑張つたのでしたは何しろ子供たちが小さいのでその頃は乳呑児もありましたので疎開したのでした。この町へ来たのは終戦の年の秋の終りでした。いや戦争では本当にとんだ目にあひました。いまの仕事は同封の名刺で御想像下さい。全く百八十度の転換です。しかし習ふより慣れるとはよくいつたもので此頃ではどうやら切り廻りしてゐます。宮城県の瓦では質からいつても量からいつても当地が一番です。今は進駐軍宿舎用のものの製造で手が廻りかねる有様です。仙台もよく／＼やられました。が着々と復興しつゝあります。仙台へは殆ど一日おき位には出て居ます。この町より約一時間ですがいまは汽車がひどく混むので閉口です。この春から東京の方へ帰つて或る出版社に招かれて、そこで社長の補佐役をつとめるわけでしたが準備をしてゐるうちに紙きゝんにあつてしまったので、目下の所新規計画は見透しがつかず今年一杯はこちらの方の仕事をしてゐることに決めました。

当地は仙台から汽車で度々出ますからその点は便利です。松島は

丁度中頃にあります。小生が当地に在住中に夏にでも一度都合をつけて御来遊いかわですか。第二工場が気仙沼にあるので時々出かけます。新月といふ駅を通る度に熊谷武雄の

叔母がため春の彼岸の彼岸の鐘を一つき我つきにけり

などを思ひ出します。熊谷君も亡き人の数に入つた様です。近頃当地の雑誌を見てゐてそれを知りました。みんな昔の夢となりましたね。去年の十一月に一寸東京へいきました。その時、水戸の篠原宅に一泊しました。その時に貴兄のお噂をしました。篠原の小父も中風で寝たり起きたりしてゐるとのことでした。小生のこともわかつたのやらわからぬのやら……人生の侘しさが泌々と感じられました。墓参の途次水戸の街を歩いてみました。が変わり果てた姿には呆然たるばかりでした。時間がなかつたので山村未亡人などの消息を知ること出来ずに水戸を立ちました。いつか暇を得られる時が来ましたら水戸から貴兄の里へも久々で訪れたいと思つてゐます。希はくばつゝぢの咲く頃にと思ひます。あの頃の思ひ出はいつまでもいつまでもなつかしい。山村未亡人の消息を御存知でしたらいつかお聞かせ下さい。あの頃の人では東京に松村又一君が元気でゐます。あの人はレコードの歌詞の作家として一家をなしました。現在はキングレコードの専属として活躍といつてもいまは会社の方がヘコタレてゐるのでパツとしませんがとに角元気でやつてゐます。

そちらの方は食料問題はどうか。こちらは穀倉といはれる處ですが去年の夏は飢ゑ死の一步手前までいきました。今年はいまの所毎日白い米を食べてゐます。何しろ物価のせり上る現実には閉口／＼です。イモがステキにまづい土地なので常陸千葉のイモの味を偲んで話しの種にしてゐます。カンソウイモなども従つてうまいものはありません。しかし馬鈴薯はなか／＼上等ですが今は米の値段よりも高い始末です。水戸の前田徳ちゃんはどうしてゐますか、今度の選挙では大いにハゲアタマを光らせてゐることであらうと想像してはゐますが。水戸も変わった。世の中もがらりと変わった。けれど貴兄と小生の心はちつとも変わらないと信じてゐます。いつかゆつくりと会へる日がきてしみ／＼と話したいものですね。どうぞお体をお大切におすごし下さい。皆様へ呉々も宜しく願ひます。

二月二十二日

大関五郎

新堀昌兄

大関君、私はこの事こまかな友情のこもつた手紙を見てどんなに悦んだことか。私の處などでは農村に住み幾分田畑も耕作してゐてさへ大麦飯に甘藷の千切を混ぜた賄であつた当時、食料に大した心配のないといふ消息は何よりも先づ私を安心せしめた。世の中はがらりと変わったが貴兄と小生との心はちつとも変わらないと信じてゐるといふこの友情は何とも言へぬうれしさであつた。私もこまこ

まと近況を知らせて、つゝぢのさく頃は非来て呉れる様と云つてやつたのだつた。そして来る時には前に一寸知らせて呉れ、ば駅迄出てゐる。あの長い巴川の堤防をブラリ／＼語り乍ら歩くのも亦一興であらうとつけたしたのだつた。それはこの前来た時、歸りに駅迄送りよもぎが萌え、つくしが角を出してゐる堤防を春風に吹かれつゝ、楽しく語り乍歩いた記憶が新しく甦つてゐたからであつた。だが君はつゝぢが咲いても来なかつた。散つてしまつても来なかつた。若しかしたら墓参乍お盆の頃でもふらつてやつて来るかなと思つても見たが遂に姿は見せなかつた。其翌年やがてつゝぢが咲こうとする頃、亦葉書を出して見たが返事がなかつた。私もそれつ切り遂音信を絶つてしまつた。が心の中ではいつか亦ひよこりと氣まぐれの様到手紙が来るだらう。そして又逢へる日が来るだらうと今日の今まで思つてゐた。けれど一切の望は失われてしまつた。新月の駅にかゝつては、かつて「詩歌」の同人であつた熊谷武雄君を偲び、その死を悼んだ君は、今は自ら無き人の数に入つてしまつたのだ。あゝ、この世で今一度逢つて見たかつた。そして心ゆくまで語つて見たかつた。

大関君、人間のはかなさ、君が去年の十一月から病の床に倒れてゐるとは神ならぬ身の露ほども知らなかつた。若しそれを知ることが出来たなら、はる／＼みちのくの松山町にて君の病を見舞つてやりたかつた。若しそれが何かの事情で出来なかつたかも知れぬとし

でも手紙で慰めてやる位のことでは出来たらうにと遂愚痴も出るのだ。だが奥さんの手紙で見ると「死ぬ一ヶ月位前手紙も住所録も清書した原稿も写真も、おしまひにはいのちよりも大事だといつてゐた新日本民謡もみんな破いて燃やしてしまつた」といふではないか。身も魂も亡んで行くに当たつてはこの世の一切のものを否定つくさうとしたのか般若心経が説く色即是空空即是色と一切を無とする空觀に徹しようとしたのか否元策もなく智謀もなく生まれたまゝの自然児、悲しければ泣き、楽しければ笑ふより外に知らなかつた君にそんな悟りめいたことは持合せなかつたであらう。秋風落莫靡ては身も世界も一切を掩ひつくさうと暗黒のとぼりがひた／＼と浪の寄するが如迫り来る人生のたそがれが只々寂しく悲しかつたにちがひない。「昨年十月一日床について以来十一ヶ月、たよらない私一人の手につて訪ふ人もないあけくれを昔ばかり恋しがつてはひとりでしく／＼泣いてゐました」といふ奥さんの手紙を見ると私はたまらなく可哀想になつて涙がはふり落つるばかりなのだ。

だが君の寂しがり家は今度が初めてのことではなかつた。恐らくは生まれ乍の寂しさの持主であつたらう。その処女歌集に「寂しく生きて」と題したのを見てもそれを裏書してゐることが知れる。生まれて間もなく父を失ひ次いで産みの母とも生きて別れねばならなかつた運命は実に生まれ乍らの寂しさの持主ならざるを得な

つたのであらう。

大関君、君に芸術技巧のたくみさはなかつた。絢爛華麗は元より求むべくもなかつたが水晶の玉といはうか、葉末の宿る白露といはうか、水の如き淡々たる中に純の純なるものが寂光を放つて光つてゐた。私は常にそれを愛した。今一度世に出して最後の結集ともいふべきものを見せて貰ひたかつたがあゝ惜しいことをしてしまつた。

遮莫、大関君よ、否大関君の靈よ。未亡人やゑ子さんはかたみの御子さん達を擁してこれから絵筆一本でこのけはしい生活のあらしと闘ひ抜く雄々しくも雌獅子の如く振ひ立つてゐる。私はその生活にと芸術の将来の満腔の期待をかけてゐるのだ。庶幾くば瞑せられよ。(続く)